

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	「Earth changes the space」：ものづくり 空間づくり 交流づくり プロジェクト
Author(s)	築瀬，翔太；長谷川，麻子
Citation	熊本大学工学部附属革新ものづくり教育センター年次報告書，2014：152-153
Issue date	2015-12-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/41110">http://hdl.handle.net/2298/41110</a>
Right	

# 「Earth changes the space」

## ～ものづくり 空間づくり 交流づくり プロジェクト～

建築学科 3年 築瀬翔太他 担当教員：長谷川麻子

### 1. 建築展とは

「熊大建築展」とは、熊本大学建築学科3年生が毎年11月の紫熊祭に合わせて企画提案から製作、発表までを行う学生有志のプロジェクトです。今回私達は、建築空間の「図と地」をテーマに模型やモニュメントによる展覧会を開きました。

### 2. 目的

私達自身の建築に対する知識・理解を深め、考えたことを表現する術やその難しさを学ぶことを目的とし、私達がつくった空間を体験してもらうことによって建築やものづくりの面白さ、私達建築学生のエネルギーを伝えることが出来ればと思います。

### 3. 実施概要

【テーマ：建築空間における「図と地」】

「図」と「地」とはゲシュタルト心理学において、ある図形が浮き上がって見える部分を「図」、その背景となる部分を「地」という。E.ルビンの「盃」は、盃が「図」となったり、2人の横顔が「図」となって浮かび上がって見えるが、両者を同時に認識することはできない。図形のどちらかが輪郭線となって、一方が「図」となれば、他方は背景としての形となり認識されない「地」となる。

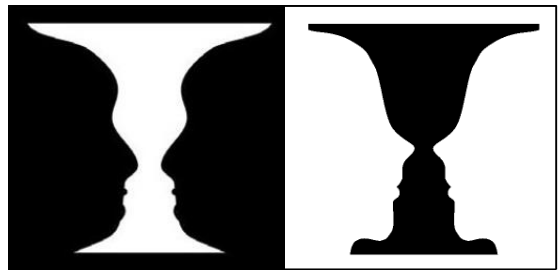
又、街の「図」と「地」の逆転で芦原義信は、江戸とイタリアの町並みをゲシュタルト的な視点から比較している。地図の白黒を反転してみると、古板江戸図から、日本の街並みは敷地割図であり、建物と街路との空間的關係を示すものではなく、両者の間には曖昧な残部空間があり、地図を白黒反転しても意味がないとした。一方、イタリアの街路や広場では、輪郭のはっきりとした「図」としての性格を保持しうるものであり、一つ一つの建物はよく見ると異なっているが、歴史的経過とともに「多様な統一」が遂げられ、街路を構造化された「図」として認めうる街並みを持っていると論じている。

このように「図と地」という概念は、一般的に聞く言葉でありながらも建築空間を考える際にもとても重要な考え方です。以上を参考に私達は、身の回りのものから街の単位まで、「図と地」の概念より「空間」を見出せないかを考えることにしました。

\*引用：建築・都市空間のための空間の文法 編著：船越徹・積田洋



(全体会議)



(ルビンの盃)



(古板江戸地図「古板江戸集」)



(イタリアの地図：G.ノリ「ローマの地図」)

## 【企画内容】

建築展 2014 は、模型やボードを展示した屋内展示とモニュメントを展示した屋外展示によって構成されています。屋内展示ではまず、私達が建築における「空間」の知識を学ぶために制作した四つの模型を展示することで、来場者の方に建築空間のコンセプトを伝え、空間に対する理解を深めてもらいます。次に、テーマである「図と地」の概念をインスタレーション・展示空間によって表現します。そして最後に、私達がこの概念によって見出した提案を模型とモックアップによって表現しています。

又、屋外展示では内部の空間を伝えるモニュメントを展示し、広告としての役割も果たします。

### ● 「図と地」の概念による提案

#### (01) Earth changes the space

視界の中に図として認識できるものがあるとして、それが空間に置き換わることができれば、元の図の背景であったものが今度は図になるのではないかと、「砂山が空間に変わる」というコンセプトのもとと子どもの実寸大の大きさのモックアップを作成しました。

#### (02) 図と地の都市の提案

図と地の構成でできている都市の空き地となっている空間に、大学を計画することで街を活性化するという提案です。ランドマーク性や結節点など都市のイメージを具体的に形づくることで都市の中の建築空間のあり方を表現しました。

## 4. おわりに

今年の建築展は、私たちにできることは何か、ということから建築を私たちの身の丈にあったスケールで考え「誰にでも簡単に空間がつかれないか」を模索し、建築の新しい可能性についてもづくりを通して考え発信していきたいと思いました。

企画を実施するにあたり、何度も企画書を作成し、内容の甘さから壁にぶつかることもありましたが、しかし、足元から見直し、先生方の助言を頂きながら、乗り越え解決し、一つの作品として作り上げることができました。

このプロジェクトを通して、提案を実現する難しさ、実際に作品としてつくる中で発生してくる数々の問題、またそれらを乗り越えた先にある達成感、ものをつくるという面白さ、作品を通して人々に何かを伝えるということの素晴らしさを知ることができました。

このような経験を学生の間でできたことは間違いなく私たちの今後の財産になると思います。まだまだ知識の浅い私たちに多くの助言をくださった先生方、快く協力してくださった大学関係者の方々、ご来場してくださった外部の方々など、このプロジェクトに関わって頂いたすべての方々に建築学科3年生一同深く感謝しております。本当にありがとうございました。



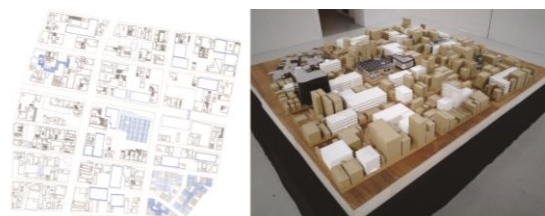
(模型写真)



(屋内外展示空間)



(Earth changes the space)



(図と地の都市の提案)